

P051.1  
U32  
1(1985)E

## 創刊のことば

塚 田 清 策

本学の国文科は創設されて日なお浅いが、斯学の研究を深め発展せしめるために本学に国語国文学会が発足し、なお「学海」なる研究論文集を発刊することができるとなつたことはまことに喜ばしく、同慶の至りである。

「学海」なる語は中国古典に見え、揚子の法言の学行篇に「百川学海而至于海」（百川海を学びて海に至る）とあつて、川の水が流れてやまず海に入る、その海を学ぶ意から、学問にいそしむたとえに用いられている。またさらに引きのばして、学問の広大にして限りないことのたとえにも用いられている。

鎌倉時代には本学の在る塩田の地

方は「信州の学海」と云われていた。信州保科の出身の無関普門（大明国師）という名僧の経歴を記した「塔銘」という文の中に、

却<sup>ニ</sup>回信州<sup>一</sup>、館<sup>ニ</sup>塩田<sup>一</sup>、乃信州之学海。凡涉<sup>ニ</sup>経論<sup>一</sup>之学者、擔<sup>レ</sup>簞負<sup>レ</sup>筴、自遠方来而皆至焉、師趨<sup>ニ</sup>其席<sup>一</sup>、無<sup>ニ</sup>虚日<sup>一</sup>矣。

とある。この文は塩田中学校庭に、訳文にして、半田孝海大僧正が書いた碑が建てられている（写真）。それに依れば無関禅師は若い頃塩田に来て勉強したことが知られる。その学問道場は別所の寺や中禅寺・前山寺などであつたであろう。無関禅師の如く、当時学問仏教を研究するものは、本箱を背負って遠方から塩田に

来たことと察せられる。このように塩田平は鎌倉時代は北条氏の重要な土地であり、また学問宗教の一大中心であつた。この信州の学海であつた塩田平に所在する本学は、昭和時代の信州の学海となるべく、学問的に発展することを期待して創刊のことばとする。（本学会会長・国文科長）

